

「投資」概念の分析に基づく経済思想論考

— もう一つの「衣装哲学」の語源的定位 —

鈴木 一 存

1. 序論

「投資」概念を指示する語の意味と語源、およびそれと関連する概念とのネットワークについての複合的解釈は現時点においてもなお考究の余地がある。ハイエクのいうように、「経済概念の検討にあたって…最初の作業は一つの語句に…付着しているさまざまな概念を分離し、それらを…分類し、分析用具として準備すること¹⁾」であり、分析対象とする概念の指示する語彙の語源と意味の分析こそ、経済思想の知見の正当性を担保することを可能とするのではなかろうか。

本論文では、「投資」概念を表現する investment / invest の語源的意味連関を分析し、その分析結果を活用することによって、経済思想における知見を導出する²⁾。概念とは、その本義に沿って使用されることで正しい効力を発揮する。本研究が「投資」概念の本義解明への貢献となれば幸いである。

2. 先行研究の概観

経済学研究では、特にケインズの研究において、主にマクロ経済学的視点から投資概念について示唆に富んだ表現が多数看取される。また、当該概念の学術上の性格から、ドイツ経営経済学³⁾において個別の企業活動における投資概念の規定・定義も数多く試みられてきた。一方でそれらは経済学研究という性質上いずれも投資概念の内容を中心に検討されたものであり、概念規定に必要な語源的・語義的分析には追究の余地が残されている。

管見の限り、investment の語源と意味に関して現時点で最も詳しく分析した研究は、Anderson (1998) であろう。しかしながら当該研究のとりあげている語源と意味には限りがあり、必ずしも概念分析に必要な分析を量的・質的に満たしているとはいえない。また、当該研究は人文学の域を出ていない。Forman (2004) は investment に関して英国東インド会社の植民地貿易に焦点を当てる研究である。しかし、当該研究は特定の時代にフォーカスしていることから、概念分析としては不足が生じている。よって、経済思想の見地からは追究の余地がある。

以上の「投資」概念に関する先行研究の課題を端的に示すならば、語源・意味方面の研究においては当該概念に関する経済思想の知見が欠落しており、経済思想の研究においては当該概念の語源・意味を分析する余地が残されている。すなわち、語源・語義的分析によって導き出された

分析結果に基づいて経済思想の論点を検討すれば、両研究領野の空白地帯を補完しあいながら、分野融合的な研究へと高める展望がひらける。先行研究の現状に鑑み、本論文では、「投資」概念の経済思想的な研究可能性と語源的な概念分析の可能性の双方を満たすべく、「投資」概念を指示する語 *investment* / *invest* に関して語源的・語義的分析を多角的に行った上で、その分析の結果から導き出される内容を経済思想における既出の各論点と対照しつつ考察し、考察内容を総合して経済思想として有意義なテーゼを確立することを試みる。

3. *investment* / *invest* の指示する意味の概観

investment の語源と意味については、Anderson (1998) が *Oxford English Dictionary* などの情報をもとに比較的詳細にまとめているものの、ラテン語・イタリア語などの英語以外の言語の視点が不足している。本節では、OED online (2023) の記述内容に即して、当該の語の語源と意味について概略を提示することからはじめて、当該の語と関連するラテン語・イタリア語の視点も含めて、その語源と意味の全体像を提示する。

名詞 *investment* は動詞 *invest* の名詞形であり、名詞を形成する接尾辞 *-ment* を伴っている。動詞 *invest* は接頭辞 *in-*「中に」を伴っており、語根の *vest* の部分は古典ラテン語 *vestis* “clothing”「服⁴⁾」にまで遡ることができる。動詞 *invest* の現代的意義「～に投資する」に至るまでの意味変遷は、おおよそ以下の通りとなる。すなわち、原義「～に服を着せる⁵⁾」という直接知覚可能な意義から出発して、「(何らかの物体)を包みこむ⁶⁾」という一般的な意義にシネクドキ⁷⁾的に拡張される。その後、「～を(軍事的に)包囲する⁸⁾」や「～を(仕事などに)従事させる、没頭させる⁹⁾」というメタファー的に拡張した語義も加えて多義化しつつ、「～に権力を与える¹⁰⁾」や「～に威厳を与える¹¹⁾」という抽象的な意義をメタファー的に生成する。そしてその意義が「～に何らかの属性・性質・特徴を与える」というさらに一般的かつ抽象的な意義にシネクドキ的に発展し、最終的に「～に投資する¹²⁾」という経済関連の意義がメタファー的拡張に基づいて発生したと考えられる。

ラテン語由来の語彙であることも手伝って、*investment* / *invest* の両語の同語源語は数多く残されている。Anderson (1998) が指摘しているものを挙げれば、「聖職叙任」を意味する *investiture*、「礼服」ないし「法衣」を意味する *vestment* や *vest* がある。そして *investment* / *invest* とは綴りの外見が異なるが、「服を着る」ないし「すり減る」という意味を表す英語の動詞 *wear* も印欧語根を共有する同語源語として挙げられている。

続いて、*investment* / *invest* に関して、筆者が当該の語のラテン語・イタリア語における語源および意味の知見を補足する。中世ラテン語期の文例¹³⁾および14世紀からの「イタリア語」揺籃期におけるボッカチオの『デカメロン』における動詞 *investire* を含む文例を分析すると、「～に投資する」という意味を示す文例が複数観察される¹⁴⁾。こうした文例においては、邦訳の表現としては、表面的には「～に投資する」という語義が当てられているものの、その実態としては、

「～に出資する」という程度の意味しか解釈し得ず、「出資」の目的は文脈からは必ずしも明瞭に解釈し得ない。英国東インド会社における「投資」概念を研究した Forman (2004: 614ff.) の分析結果と同様に、商業的な文脈においては、短絡的な利得を目的とする「投機」の意味を表している例が多くなることはもはや当然であるといえ、その意味で参考にはならない。限られた文例から判断可能なことは多くはないが、少なくとも現代における長期的な利得を目的とする「～に投資する」という意味が生産的なレベルにまで本格的に普及するのは、本稿で取り扱うような後代の経済学研究・経営学研究の興隆を待たなければならなかったと考えられる。ただし、後述するように、「投資」概念の本義の萌芽は、当該概念を指示する言語表現の原義および意味連関に観察される。

以下では、語源辞典記述などによって investment / invest の両語の同語源語を幅広く参照した上で、両語の指示する意味と比較対照するとともに、両語とともに頻繁にあらわれる概念の意味とも比較対照することで、両語によって指示される「投資」概念の意味的な広がりやを同定する。さらに、「投資」概念それ自体およびそれと対比される概念との間の関係性に関して、関連する経済思想的記述をとりあげ、その背景として潜在していると考えられる、各概念を指示する語彙に由来する語源的・意味の規定要素と比較対照する。以上の分析手法を通じて、「投資」概念のより一層の詳細な規定と、その複合的な全体像の解明を試みる。

4. 語源的意味連関と経済思想による「投資」概念と他の経済概念との比較対照分析

4.1. 投資 investment と投機 speculation：長期的保護と短期的収奪

一般的な文脈においても、しばしば投資 investment と類義関係をなしているものとして認識されやすい傾向にあり、経済学および経済思想分野においても区別が必要となる概念として、まず投機 speculation が挙げられる。

投資・投機の語源的由来をたどれば、両概念間の知覚的差異が浮かび上がる。investment「投資」の原義は「衣をかぶせること」であり、この行為は対象が比較的近距离にないとなし得ない。これに対して、speculation「投機」の原義は「監視すること」であり、この行為においては対象が比較的遠距離にあることが暗示されている。一般に、行為対象との物理的距離は、当該対象との親密さや信頼度に反比例するものである。speculation が「懐疑的な」という意味を表す英語 skeptical と同語源の関係にあるという事実¹⁵⁾は、上述の推論を裏づける決定的な傍証となりうる。すなわち、「投機」speculation の背景には「疑念」が、反対に、「投資」investment の背景には「信頼」が想定されうる。一方、投機それ自体は「機敏と目先予測とを必要とする¹⁶⁾」ため、投機の前義は空間的には遠隔的な行為であることを含意しているが、時間的には「目先」を追うばかりの短期的行為である。つまり、「投資は永續的固定的性質を持ち、投機は短期的變動的性質を持ってゐる¹⁷⁾」といえる。investment は「職・権力を与えること」という意味も含むものであり、同様に「投資」という意味においても、投資行為者の投資対象に対する比較的積極的・直接的・

建設的な関与を表現しているといえる。このことは、ケインズが『一般理論』で、speculation「投機」との対比において、investment「投資」の代わりに用いたenterprise「企業¹⁸⁾」という語の語根の原義が「つかむ」であるということからも裏づけられる。これに対して、speculationは「思索」「推測」「思惑」など思考に関係する意味から構成されており、投機行為者の投機対象に対する関与の姿勢が比較的消極的・間接的・非建設的であることを表現しているといえる。両語の語源の原義から、以下の仮説が導き出される。「投資」の場合は、投資実施者が投資に際して投資対象を尊重するのに対して、「投機」の場合は、投機実施者が投機に際して対象に対する疑念・不信の類に支配されるなど、必ずしも投機対象を尊重しているとは限らない。「投機業者にとって大事なことは、たゞ価格の變動…を豫見することのみ¹⁹⁾」であって、みずからの投機行為の結果として投機対象や他者に将来起こりうる経済的な不幸・災難・損失のリスクを顧みない。また、「(再)投資を目的とする賣買が賣買それ自らを目的とする賣買に轉じた時、それは、投資の要素を失つて投機に轉化したものである。²⁰⁾」この投資が投機へと「轉化」してしまうプロセスは、まさにヒュームの指摘する、人間の本来的な「獲得愛」が貪欲へと転化・逸脱してしまうプロセス²¹⁾にはかならない。投資は「構造的資産財の調達に対する」「目的的²²⁾」な行為であるのに対して、投機は自己目的的な行為である。投機においては、佐伯啓思の指摘するように、「欲望は欲望自体を追いかける²³⁾」のである。こうした投資と投機の間の対比的な関係性は、ケインズにおいては投資と過度な「貨幣愛」という関係性として捉えられている²⁴⁾。「投資」では、投資対象に対して比較的関心が高い。これに対して、「投機」では、投資対象という本来の目的よりも、貨幣の集積という、本来は手段にすぎない行為²⁵⁾が、他者や投資対象への疑念・不信の結果として、行き過ぎた「貨幣愛」として自己目的化している。

4.2. investment と travesty : 「本物」への「投資」と「偽物」への「投機」

investment は、同語源語 travesty の存在によっても規定されうる。この語は、「衣服を着せること」ないし「衣服」を原義とする語根に、「超えて」という意味を指示するラテン語由来の接頭辞 trans- の異形 tra- が付加されている。travesty には「偽物」という意味がある。上記の造語論的知識から travesty の語源の原義を検討するならば、語全体として「衣服を着せる対象を誤ること」という意味を指示していたといえる。素性も将来性も不明であるリスクある対象に投資をすることは、「本来衣服を着せられるべき＝投資されるべき対象、つまり「本物」に衣服＝投資が行き渡らない」という不条理を必然的に誘発する。この場合には、本来守るべき最も大切な「資本」を「永續的」に守るという「投資」の本義から外れてしまう。投機のような短絡的態度で売買取引に臨むとき、我々は自己目的的かつ利根的に利ざやを追求するあまり、徒な放蕩と浪費の末に本質を見失ってしまうのではないだろうか。

4.3. investment と disinvestment・exuviae : 「忍耐」と「短絡」

ケインズの『一般理論』においては、investment に反対の行為を表現する接頭辞 dis- を付した

disinvestment という語を「負の投資」として挙げている²⁶⁾。この語は「投資の減額・中止」「資本の引き揚げ・回収」および「資本の食いつぶし」を意味する。「投資」は本来その持続可能性を理想として掲げる概念であるが、投資を取り巻く環境・状況次第では、投資の取り止めに余儀なくされる場合も視野に入る。「投資」の本義を尊重する場合、投資の取り止めないし資本の引き揚げが許容されるのは、あくまでも「資本価値保全の目的に適する範囲内に於て一層有利に利殖すること²⁷⁾」という範囲を超え出ない場合に限る。仮にこの範囲から逸脱して投資財の引き剥がしが行われた場合、そのような行為は「投資の趣旨を没却して、投機に走つたことになる²⁸⁾」のであり、もとは手段であった売買が自己目的化した投機に墮するということになる。

上述の内容から導き出されることは、「投資」における買い換えは、「投資」にとって時としてやむを得ず生じる一種の犠牲のような位置づけにあるということである。犠牲というものは本来、健全なる行為の結果としてやむを得ず生じてしまうものである。その犠牲を当然のごとく原理の中心に据えた投機は、私欲を優先して自らが引き起こす不必要な損害と混乱をいとわない自己目的化の倒錯的病理である。speculation「投機」の本質は、投資財の引き剥がしとその移動、すなわち投下資本の安直なつけかえの繰り返しによる短期的利益の奪取であり、ここに投機の実需原則と乖離した自己目的的メカニズムが浮き彫りとなっている。マルクスは、「競争において蒙った不利益・損失を労働者に転嫁しようとする力が強く作用している²⁹⁾」ことに注目し、「資本家は労働者の搾取を高めることによって損失を償おうとしている³⁰⁾」というメカニズムを明らかにしている。このとき、資本家はみずからの損失を埋め合わせるために、本来労働者のことを慮って労働者に手厚く「投資」すべきところを、労働者の存在を軽視する自己目的的な「投機」に墮している。

investment の同語源語として、exuviae という語が存在する³¹⁾。この語はラテン語の動詞 exuō「脱ぎ捨てる」に遡る名詞であり、「抜け殻」という意味を指示する。つまり、investment「投資」によって提供される投下資本という「衣服」は、本来、投資対象が投資された後に成長・成熟を遂げ、やがて不要になった場合に「抜け殻」として自然に取れてしまい、はじめて捨てられるものなのであって、成長・成熟が終わらないうちに強制的にその「衣服」を剥がす disinvestment という行為は、投資対象の成長・成熟を阻害する行為である。

4.4. 投資 investment と金融 finance / Finanzierung : 「無期」と「有期」、「信頼」と「不信」

investment「投資」概念は、特にフィナンチールンク研究において、「金融」finance / Finanzierung 概念と対を成している。「金融」概念とは、一定の期日に機械的に返済することが要求されていつか終わりを迎える、閉鎖的円環のごとき時間の発想に沿ったものである。finance の原義は、期限という「終わりを定めること」である。フィナンチールンク研究の定義によれば、「他人資本は、原則として法的に期限が定められており、協定期限内に償還されなければならない³²⁾」。他方、「投資」概念とは、必ずしも投資当初の時点から投資（額）の全（額）返済（あるいはそれに相当する価値の全返還）が確約されているわけではないという点で、半永

久的に持続可能な開放的な時間の発想に沿ったものである。投資は無限の可能性を育むものであり、投資対象からもたらされる恩恵は、投資開始時点からは予測不可能である。

「金融」概念は有期の発想であり、「投資」概念は無期の発想である。上述の「投資」と「投機」の対立構造と同様に、有期という発想の背景には、当事者間の信頼関係の不足、ひいては貸し手から借り手への疑念が少なからず働いている可能性がある。対して、無期という発想の背景には、当事者間に十分な信頼関係が働いている。*invest* が「～に権力・仕事を与える」という意味を指示するが、これも労働者を十分に信頼して「仕事を任せる」のである。

4.5. 投資 *investment* と消費 *consumption* : 「摩耗」からの「保護」

ケインズが『一般理論』で有効需要の原理を確立したことは周知の事実であるが、この有効需要は投資需要と消費需要によって構成されており³³⁾、投資概念と消費概念はこの意味で対立関係にある。以下、投資 *investment* と消費 *consumption* の語源と原義を対照する。

英語における *investment* / *invest*、ひいてはそれらの源であるラテン語 *investire* の原義はすべて「衣をかぶせる (こと)」である。これらの各語は、この原義から、「～に権力を付与する」「～に特徴を付与する」などの意味にメタファー的に多義化したのち、「～に投資する」という経済関連の意味が登場する。

一方、*consumption* の原義は「取ること」であり、「体力などの物理的消耗」などの意義にメタファー的に拡張したのち、「消費」という経済関連の意味が登場する。

investment と *consumption* の両語における原義および派生義を概観すれば、前者に関してはすべての語義に共通して対象への何らかの要素の付加を表現しているのに対して、後者に関してはすべての語義に共通して対象における何らかの要素の減衰を表現している。「投資」と「消費」の両概念では対象に対するアプローチの様態が正反対である。*consumption* 「消費」においてはゼロサムの収束的思考様式が支配的であるのに対して、*investment* 「投資」においては創発的な発散的思考様式の様相を呈している。「消費」は、「投機」と同様に、その場しのぎの短期的な目先の見通しに基づいた行為であり、対象の持続可能性を考慮に入れていない。これに対して、「投資」は、長期的な展望に基づき、対象の持続可能性を考慮する。

investment と同語源の語は複数存在するが、その中でも *wear* との関連性は触れておかなければなるまい。英語の動詞 *wear* には「着る」および「すり減る」という意味がある。これら両義の関係性は、衣服を長期間「着る」とその結果として「すり減る」という因果関係を契機とするメトニミーに基づいている。鈴木 (2023) でも述べたとおり、同語源語間には意味的連続性がある可能性が否定できない。ここで、「衣服を着せる」という原義をもつ *investment* は、英語において印欧語根を共有する同語源語 *wear* と意味的連続性をもつと仮定してみる。同語源語である *wear* の「すり減る」という意味を前提として *investment* の「投資」という意味が生成された場合、「投資」という意味には「いずれ減衰していくものを補いつつ更新し続けること」という意味内容が包含されているという可能性が想定されうる。時間の経過とともに摩滅する価値を損な

わないようにするさまは、まさに「更新投資」であり、江口のいうところの「資本価値保全³⁴⁾」を第一条件とする投資概念像に符合する。またこれと関連する事例として、マルクスが資本の *Verschleiß* 「磨損³⁵⁾」という表現を用いているということに着目すべきであろう。「磨損」とはまさに *wear* の指し示すものであり、この「資本の磨損を予防するために保護すること」という意味を表現すべく、「衣服を着せること」という原義から発展した *investment* という表現が「投資」概念の指示に充てられているのではないだろうか。上述の意味の想定経路は、*investment* と語根を共有する同語源語 *revetment* がまさに「防護壁」という意味を表すことによって十分に裏づけられる。

4.6. 投資 *investment* と貯蓄 *saving* : 「フロー」と「ストック」

「消費」と対をなし、「投資」と密接な関連を持つ概念に *saving* 「貯蓄」がある。両概念は、後述するように、特にケインズによって対比されている。「貯蓄」概念を指示する *saving* の語根をたどると、まずは動詞の *save* に遡ることができる。この英語における *save* という語はラテン語由来であり、「安全な」という意味を表す形容詞 *safe* と同語源である。これら両語はともに、ラテン語において「無傷の、手つかずの」という意味を表す *salvus* という語に起源がある。これら各要素全体に共通する原義は「健全さ、良好な状態を保つこと」である。この原義は、英語における同語源語である *solid* 「固体 (の)」というラテン語由来の語³⁶⁾ の指示する意味を見ても明らかである。「貯蓄」概念を指示する *saving* は、おおむね「外傷などの損耗のないように健全な状態を保つこと」ではないだろうか。

ケインズの『一般理論』によれば、「投資」*investment* と「貯蓄」*saving* は「同一事象の相異なる両側面³⁷⁾」であり、両概念間の経済学理論上の等号的関係を指摘した³⁸⁾。柴山桂太はケインズの経済思想を分析し、「貯蓄」は、実質的には「投資」の影である³⁹⁾ とするテーゼを指摘している。このテーゼは、古典派経済学における「貯蓄」を重視する一方で「投資」を軽視するテーゼと真っ向から対立するものである。「貯蓄」重視・「投資」軽視の古典派経済学のテーゼは「貨幣ヴェール観⁴⁰⁾」として知られており、貨幣・信用と実体経済とを分離してとらえる。ケインズは、この「貨幣ヴェール観」を批判した⁴¹⁾。ケインズ＝柴山は、貨幣・信用の可能性を肯定的かつ拡張的に再解釈し、「投資」に貨幣の活路を見出した。古典派は、貨幣をいずれ脱ぎ捨てる *veil* とみなして投資を軽視する一方、ケインズ＝柴山は、経済的「衣服」を着せる行為とも言うべき *investment* 「投資」を重要視している。これらの相反する両テーゼに共通して、「投資」概念と「貯蓄」概念は密接な関連性を呈している。ケインズのいう、「投資」概念と「貯蓄」概念が等しい位置づけにあるということは、先述した「貯蓄」*saving* の原義「外傷などの損耗のないように健全な状態を保つこと」が、「消費」*consumption* の原義との関係性において浮き彫りとなった「投資」*investment* の原義「資本の磨損を予防するために保護すること」(前節 4.5.) と類似しているということによって裏付けられるであろう。

「投資」と「貯蓄」の二項対立的構造は、柴山 (2012b) において重視されている「フロー」

と「ストック」というもう一組の二項対立的構造⁴²⁾と組み合わせて考えた場合、より一層豊かな展望が広がる。さらに、「自由」と「保守」という両概念の伝統的な二項対立的構造も、当該の論点に関連しうる。以下では、「フロー」と「ストック」について、「投資」との関連性を中心にすえて検討する。

マルクスは、「資本主義的生産が、あらゆる吝嗇にもかかわらず、人間材料については全く浪費的である⁴³⁾」と指摘する。われわれ人間が自らの日常生活を「投資」によって守ろうとすると、その「投資」対象となる「資本」「ストック」を浪費せず、豊かにしておく必要がある。貨幣（ないし証券）の流れである「フロー」と対比される「ストック」は、過去から現在へと持続的に流れる時間の流れの中で蓄積される財であり、有意義な人間関係の蓄積をベースとする社会関係資本（ソーシャル・キャピタル⁴⁴⁾）とも連続性がある⁴⁵⁾。柴山は外見的な数統計情報である「フロー」に偏重する現代経済学の計量偏重的バイアスを危惧し、むしろしばしば計量困難な「ストック」をこそ重視する必要性を指摘している⁴⁶⁾。

「ストック」の場合とは反対に、「フロー」である貨幣⁴⁷⁾は、ケインズのいうところの「貨幣愛⁴⁸⁾」の働きによって、それ自体を溜め込むことを目的として倒錯する退蔵 *hoarding*⁴⁹⁾に陥ることなく、あくまでも次なる「投資」の機会に備えるという目的で「貯蓄」されなければならない。*saving*の語源はまず動詞形の *save* に遡ることができ、この原義は「次に使うときに備えて今は使わないでおく」ことである。「貨幣愛」による倒錯の結果、「フロー」を退蔵すること、すなわち無意味に溜め込むことは、ケインズの指摘する通り、経済循環の停滞を招く⁵⁰⁾。ケインズのいうように、「貯蓄」の真の目的は、蓄積された「富」それ自体というよりも、「潜在力」あるいは「見込み収益」なのである⁵¹⁾。すなわち、「貯蓄」概念の本義は、「フロー」の貯蓄ではなく「ストック」の貯蓄とその持続的な発展可能性を志向しているのである。柴山の指摘する「フロー」と「ストック」の対比的な関係性を十分に認識した上で、「フロー」を無意味に溜め込むことなく、かつ「ストック」を徒に浪費・損耗することなく、この両方のリスクに常に注意を払うことが肝要であろう。

筆者の視点では、古典派とケインズ＝柴山の提示する両テーゼをめぐる議論の終着点は、「フローとして機能する貨幣の自由な投資」と「ストックとして機能する人間社会の貯蓄による保守」との峻別とそれらの両立に帰着する。そして、ケインズ＝柴山が「投資の社会化⁵²⁾」を重要視したように、「フロー」の投資は、「ストック」である社会の福祉にかなうよう運用されなければならない。なるほど古典派がいうように、貨幣は「ヴェール」であり、経済の核心としての社会それ自体ではない。しかし、ケインズ＝柴山がいうように、貨幣は「投資」を通じて経済の核心としての社会に作用する重要な要素であることもまた事実である。貨幣は「フロー」であり、「ストック」としての人間社会に「投資」されることで、それを「衣服」のごとく保守し、その蓄積と発展を支える用途で用いられなければならない。

本来の資本主義経済システムを機能不全に陥れる病理は、この本来的な複合構造をねじれたものとして見誤ることに起因しているのではないだろうか。そのねじれは、以下の二種類の様態に

大別しうる。①本来自由かつ積極的に活用されるべき「フロー」として機能する貨幣を、あたかも容易に手をつけてはいけな「ストック」であるかのように溜め込んでいつまでも使用しないこと。②本来「ストック」として保守されるべき人間を中心とする社会生活の諸要素を、あたかも「フロー」であるかのごとく数量化し、制欲することなしに浪費すること。この両様態の少なくともいずれか一方の思想の歪みをはらんだ途端、本来正常な資本主義経済システムが欲望の暴走する病理へと変貌するのではないだろうか。

「フロー」と「ストック」というもう一つの二項対立的構造の検討によって、上述の「貯蓄」**saving**に関する語源的知見の全体像も徐々に明確なものとなる。すなわち、**saving**「貯蓄」の対象が専ら「フロー」としての貨幣であると仮定すれば、その状態はケインズのいうところの病理としての過剰な「貨幣愛⁵³⁾」であり、退蔵 **hoarding** が促進されるばかりで経済循環は停滞する一方である。「外傷などの損耗のないように健全な状態を保つこと」という「貯蓄」の原義は、まさに「投資」と同様に、「フロー」としての貨幣ではなく、「ストック」としての我々人間社会を対象としており、「保守」のメカニズムを表現しているのではないだろうか。

貨幣によって代表される「フロー」は、平時に世を忍ぶ仮の「衣服」であり、我々の大切な人間社会である「ストック」をあらゆるリスクから守るために、信用創造などの手段を用いて惜しみなく使われなければならない。他方、「ストック」は、将来現れるかもしれない大切な存在を守るために必要となる、「フロー」が機能不全に陥る非常時の真の「衣服」となる可能性を秘めた「蓄え」であり、その非常時の真の「衣服」を投資対象にかけてやろうとしたときにはすでになくなっているという悲劇を招くことのないように、慎重に運用されなければならない。我々の生活を守る「フロー」を不必要に出し渋り、損失を埋め合わせるべく労働者という本来的な投資対象を搾取・虐待した結果、労働者という有限の「ストック」を食いつぶした後にその過ちに気づいても取り返しがつかない。

4.7. 投資 **investment**・装備 **equipment**：「保全」・「維持」

ケインズは、『一般理論』において「投資」概念を「装備」**equipment** という語を用いて表現している⁵⁴⁾。経営経済学の文脈でも、「投資」概念は「装備」として表現される事例が多く見受けられる。**Schneider** (1973) は、「投資」を「生産手段の購入によって装備される支払いの流れ⁵⁵⁾」と表現している。また、経営経済学者 **ル・クートル** によれば、「投資」とは、「資本の運用によって、貸借対照表の積極側に示されたすべての資産部分で経営を装備すること⁵⁶⁾」であるという。また、これらの「投資」と「装備」との関係性と並行して、「資本」は「設備」と関連付けて表現されることが多い。例えば、ケインズは「投資」を「資本設備の価値に対して…新しく付加されたもの⁵⁷⁾」として定義している。こうした「資本」を「設備」と関連付けて表現する事例は、ドイツ経営経済学研究の記述でも見受けられる⁵⁸⁾。つまり、「投資」は「設備」となった「資本」に対する「装備」として表現されている。

Ballman (1954) によれば、「投資」を具体化するためには、「経営体における企業理念を装備

すること⁵⁹⁾」が必要であるという。ケインズがラムジーの批判を回顧しながら自身の「蓋然性」の概念を「装備するもの」outfitとして定義した⁶⁰⁾ように、「投資」とは、いわば「企業理念」という日々の経営実務において得られた「蓋然性」を「装備」することではないだろうか。「装備」を意味する英語のequipmentの語源は「船」shipの装備であり、船が難破しないように補修をほどこして保全する行為である。「投資」とは、投資対象という「船」が難破しないように、頃合いを見計らって投資対象に装備を施し、長期的に「保全」「維持」することなのかもしれない。

4.8. 投資 investment・配慮 care・保育 incubation: 「配慮」による「養育」と「成育」

「投資」概念は、経済学研究において「準備」という表現を用いて説明されることがある⁶¹⁾。「準備」を指示する英語の語 preparation はラテン語由来であり、その語根の原義からして「～を生産する」「～を調達する」を意味する。また、この語は parent「親」とも同語源である。投資主体が投資対象のために「準備」や「調達」をするのは、投資主体が投資対象を、まさに親が幼い子に対するように「心配」し、つまり心を配り、「配慮」して「世話」するからであろう。この一連のプロセスには因果関係が働いている。これらのプロセスの各段階を指示する意味が一語の中に内包されるメトニミー的な意味変遷過程は、ラテン語起源の英語 care に一部観察される。あるいはゲルマン語派由来のものとしては、ドイツ語 sorgen にもこれと類似する意味変遷過程が観察される⁶²⁾。「投資」という「準備」の背景には、care / Besorgnis「配慮」が働いているのではないだろうか。ヨーロッパ最古級の経済学関連文献であるクセノフォンの『家政学』(OIKONOMIKOS)によれば、耕作の成否は農業に関する専門知識の有無というよりかは、「配慮・慎重さ・注意深さ⁶³⁾」(ἐπιμελεία)あるいは「耕作や労働への愛」(φιλογεωργίαν και φιλοπονίαν⁶⁴⁾)の有無にかかっているという⁶⁵⁾。これと同様に、「投資」の成否も、「配慮・慎重さ・注意深さ」の有無にかかっているのかもしれない。奇しくも、Du Cange の中世ラテン語辞典の記述によれば、investire と同じ語根によって構成され、接頭辞 in- の付加されていない vestire という動詞の意味には、「～を耕作する」という語義が含まれている⁶⁶⁾。「投資」概念と「配慮」「ケア」概念との間の有機的連関は、国家による投資を活用して社会保障を充実させようとしていたケインズの経済政策方針と符合する。

投資対象に中身が備わるまでの間、外界からの悪影響から保護する被膜が必要である。investment の原義「衣服を着せること」を考慮すれば、その被膜をかぶせることこそ「投資」にほかならない。「投資」対象の準備に一定の時間がかかるということに関しては、ケンブリッジ学派のピグー⁶⁷⁾とロバートソン⁶⁸⁾の提示した“the period of gestation”「懐妊期間」という概念が想起される。「懐妊期間」は、ロバートソンの定義⁶⁹⁾によれば、「生産に必要な手段の組み立てと使用準備に必要な時間の長さ」であるという。まさに親が幼い子を守るのである。現代ビジネスにおける起業・創業支援を指示する incubation はラテン語由来であり、原義は「孵化」「卵が孵る(かえる)こと」である。卵を孵す(かえす)には、温めるなど、親の生物個体が孵化の成

就にむけて卵に寄り添い続ける必要がある。そうして卵の内部の生命は一定の期間をかけて「成育」され、やがて卵の殻という「抜け殻」から抜け出て外界での生をはじめ。先述したとおり、*investment* もこの *incubation* 「成育」の過程と類似して、*investment* 「投資」という *vest* 「衣服」の内部で「成育」され、やがてそれによって成長した結果、もとの *vest* 「衣服」であった *exuviae* 「抜け殻」を脱ぎ捨てていく過程を表現しているのではないだろうか。

マルクスや宇野弘蔵などによれば、特に不況時の不足と制限に満ちた状況下においては、新投資による不毛な競争が回避され、資本の余力に乏しいために有限の資本が更新投資によって堅持・確保される傾向にあり、その投資領域はその有限の資本に対する集中的な更新投資として既存の領域内で収束し、「資本の有機的構成の高度化」が生じる⁷⁰⁾。*investment / invest* 「(～に) 投資 (する)」、ひいてはその源であるラテン語 *investire* は、原義「～に衣服を着せる」をはじめとして、「包み込む」ないし「包囲する」など、「有限領域の画定」を伴う意味を指示する。*investment/invest* はその対象を「限定」することによってはじめて「権力」「仕事」「特徴」「性質」などを対象に付与しているのであって、「投資」できる対象も同様におのずから限られている。本章第1節で触れたように、「投資」*investment* はその原義からして近くにある対象にのみ実行可能な行為であり、「配慮」も有限の領域においてその有効性を確保しうる。前述の *incubation* の指示する「抱卵」・「孵化」のプロセスと同様に、「投資」においても、経済的な「衣服」という「有限の領域」に限定される中で「配慮」・「保護」を受けることによってはじめて、内部で「高度化」して成長・発展を遂げることが可能となるのではないだろうか。

上述の内容において浮き彫りとなった「投資」概念の本義は、マルクスの指摘するところの「人類を強制して生産のために生産させる⁷¹⁾」資本主義経済システムの本質としての *Zwang* 「強制」と対比されるであろう。*Zwang* は一方的に「押し付けること⁷²⁾」を意味する。一方、*invest* は「～を(仕事などに)従事させる、没頭させる」という意味をも指示する。当該の語の原義を考慮すれば、これはまさに字義通りに「お仕着せ」ということになり、上位者から一方的にあてがわれた業務ということになる。それでは、*Zwang* と *investment / invest* の両語によって指示される「強制」と「投資」の概念の間の差異とは何か。*Zwang* の意味においては、対象を尊重する姿勢が非明示的である。他方、*investment / invest* には、上述のように投資対象に対する「いたわり」が意味の背景に存在する。マルクスの問題視する資本主義経済システムにおける *Zwang* 「強制」には、本来「投資」対象となるべき労働者への尊重の念、「いたわり」や「ねぎらい」の心持が欠落しており、この意味でマルクスの指摘は正しいといえよう。一見すると本来的な「投資」のように見えても、「強制」ないし「競争」の要素が関連する場合には、目先の利益追求に熱狂する「投機」的要素を内包しうることがマルクスの批判的論説からうかがえる⁷³⁾。我々人間にとって本来的な「投資」には、「お仕着せ」がましくも成長に必要な「いたわり」や「ねぎらい」のしくみが備わっている必要があるかもしれない。

5. 「投資」概念の総合的考察

以下では、本論文を通して「投資」概念に関する語源的・意味的分析、および関連概念との比較対照分析を行って導き出された成果を総合し、さらに関連する思想とむすびつけて重層的・複合的に考察する。

前章の検討内容を簡潔に総合するならば、「投資」概念は、「真に信頼しうる自己周辺の有限の投資対象を、その成熟を願って長期的に忍耐強く育て上げるべく配慮を欠かさずに、適切な装備を施すことによって外部の損耗から保護・保全すること」であるということが導出された。

本論文において「投資」概念を指示する *investment* / *invest* の語源・語義を分析した結果、「保護・保全」というイメージが背景にあるということが浮き彫りとなった。「投資」概念の「永続的な利潤の回収」という観点への過度なフォーカスから、「資本価値の保護・保全」の観点への倫理的転回が必要である。一般的な言説では、「投資」概念の「永続的な利潤の回収」という観点到偏った結果、「投機」との本質的な差異がやや不明瞭になっている傾向にある。経済思想の立場から、「投資」概念の本来的な豊かさを世に訴えていく必要がある。

強欲と暴走という資本主義の負の側面は、「投資」本来の「保護・保全」の発想が、「投機」によって機能不全に陥る場合に現出する（前章 4.1.）。「投機」とは、*money*「貨幣」それ自体への「投資」であり、「投資」本来の目的から逸脱している。「投資」によって、マルクス＝宇野の表現する「自己増殖する価値の運動体⁷⁴⁾」となるのは、本来「生活世界」でなければならないが、それを本来投資手段である「貨幣」へと反転させた英国東インド会社の植民地貿易の文脈における「投資」概念⁷⁵⁾の実態は、「投資」概念の「保護・保全」という本義の倒錯した「投機」である。柴山のいう「フロー」は、本来「ストック」としての人間社会の日常生活を「保護・保全」する目的に沿って「投資」されなければならない（前章 4.6.）が、その本来の目的が薄れて背景化した時、「投機」へと変貌するのである。「ストック」の「保護・保全」を目的として「フロー」を自由かつ積極的に「投資」する世界を「金融世界」と呼ぶならば、本来われわれが送るべき知徳と対話の支配する平穏な日常生活の世界は、まさしくハーバーマスのいう知的営為としての「コミュニケーション」に満ちた「生活世界⁷⁶⁾」である。ハーバーマスの「生活世界」は「自明性ないし上動の確信の貯蔵庫⁷⁷⁾」とも表現されており、人間社会の伝統・文化・慣習という知的営為の集合体である「ストック」に相当する。佐伯は、オークショットの「保守的であること」の定義⁷⁸⁾を引用した上で、「生活の「基調」となるのはあくまでも「保守的なもの」⁷⁹⁾」であるとしている。佐伯の論じるように、我々の生活世界は保守によって成立しているということ是否定し得ない。本来の「投資」が活発かつ自由に行われる「金融世界」の背景思想と、人間本来の「生活世界」を支える知徳と対話の経済システムの背景思想⁸⁰⁾によって構成される分類枠組みと基本的発想を共有する分類枠組みは多数存在する⁸¹⁾。本稿は、生活世界の保守と金融世界の自由の両立を前景化することで、当該分類枠組みを再構成・再定義するものである。正常な資本主義経済システムに病理が宿るのは、本来の「投資」が「投機」へと変質した結果、「金融世界」

の自由に基づく経済思想が「生活世界」の保守に基づく経済思想の自律を圧迫することに起因する。

われわれは、今や「金融世界」の自由に基づく経済思想の「生活世界」の保守に基づく経済思想への浸潤を防ぐ必要がある。これはハーバーマスの提唱する「生活世界の植民地化⁸²⁾」の防止というテーゼとも符合するであろう。マルクスが警告した資本主義経済システムの病理は、「金融世界」の自由に基づく経済思想の「生活世界」の保守に基づく経済思想への浸潤ではなかろうか。労働者という労働力に投資せずむしろ消費し、人間である労働者をあたかも物質であるかのごとく使役し、代替可能なモノとして頻繁にとりかえ、消耗しきった労働力から生氣がなくなる(前章 4.5.)。これはまさにマルクスのいう「人間の人間からの疎外⁸³⁾」であり、同じ人間であるはずの他者を視野から外し、モノとして扱ってしまうということであると同時に、経済システムによる生活世界の破壊である。これはハーバーマスにおいては、「制御危機を生活世界の病理で肩代わりさせるということ⁸⁴⁾」として指摘されている。この「生活世界」を投機することによる弥縫の連鎖は、資本主義というよりは、昨今の仮需優位の拝金主義に起因している。

真に排撃すべきは、人間でもなければ社会経済システムでもなく、それらを動かす原動力となる思想に潜む病理である。マルクス『資本論』の暴く資本主義原理の真の病巣は、その背景となる思想に穿たれた細部に宿る。佐伯が指摘するように、資本主義経済体制は、相当程度精神病理に侵されている⁸⁵⁾。マルクスの指摘した真に重要な問題は、資本主義経済システムの問題点というよりも、「絶対的な致富衝動⁸⁶⁾」の結果として、本来的な資本主義経済システムから逸脱が生じたことに起因する経済的な負の連鎖ではなかったか。社会経済システムをして機能不全に陥らしめた思想の病理を突き止め、可能なことなら治療の処方箋を提案することこそ、我々経済思想研究者の使命であろう。ケインズの言うように、「将来に向かっての次の一步は…思想から生じるに違いない⁸⁷⁾」のである。資本主義経済システムを人間の生み出した一つの技術体系とみなすならば、人間にはしばしば制御困難となってしまうこの資本主義経済システムという名の技術システムを倫理的軌道にのせるべく、P. P. フェルバークのいう「技術の道徳化⁸⁸⁾」が必要であり、その「道徳化」は経済思想研究の発展によってはじめて可能となる。

柴山が指摘する「野蛮化⁸⁹⁾」のプロセスは、ウロボロスの貪食を通じて、ケインズや佐伯の指摘する過度な「貨幣愛⁹⁰⁾」を追求するようになった一連の流れに符合するのではないだろうか。我先に自己存在を飼い慣らした末に食物・売り物とし、その存在基盤たる生活世界を生贄にすることで貨幣退蔵に邁進し、無理を重ねて破滅へとひた走る、無限遡求的な倒錯の病理である。

貨幣愛への偏執と倒錯の末、正常なリスク感覚の鈍化により、リスク計算の困難な将来性の不透明な新奇さ・珍奇さに偏執した価値の異常増殖が発生したことこそ、バブルの正体ではないか。本来、出所不明の債権によって構成される金融商品などの得体のしれないものは、まさに投資の観点からは *travesty* 「偽物」にはかならず(前章 4.2.)、投資対象として不適切である。ケインズの *uncertainty* 「不確実性⁹¹⁾」概念を発展的に継承した J.P. デュビュイの提唱するリスク認知手法である、最大のリスクを最小の被害に抑え込む「ミニマックス法⁹²⁾」を実践していれば、かつて

の不毛なバブルは防げた可能性がある。

「金融世界」の自由を目的とする経済思想の肥大化に起因する「投機」という弥縫に満ちた不毛なリスクを回避する一方、反帰結主義的価値観を掲げるケインズ⁹³⁾の説いたように、将来の帰結に関するリスクを過度に警戒しすぎて萎縮することなく、現在の生を更新し続けることに価値を見出す姿勢を忘れてはならない。これは福岡伸一のいうところの「動的平衡」概念⁹⁴⁾にも類似する、投資対象を絶えず更新することで動的に保存していく思想的態度である。「維持」なき「変革」から、持続可能性が生まれることはない。

ヒューム的な過程における利益の重視と、デュピュイの掲げる帰結におけるリスクの回避を適切に組み合わせることで、この思想的態度は実践可能なものとなる。手段と目的の両側面から行為のプロセス全体の損益の均衡を賢明に保つこの思考様式こそ、経験論を基盤とするイギリス道徳哲学の伝統の流れの中において、ケインズが発展的に継承した **probability** 「蓋然性」概念⁹⁵⁾ではないだろうか。かけがえのない、貨幣価値に変換不可能な生活世界を守るべく、われわれは「保守」をしっかりと思想の中心に据えた上で、不毛な目先のリスクに手を出して有限な「ストック」を浪費することなく、「生活の指針⁹⁶⁾」となる「蓋然性⁹⁷⁾」をもって生活世界にとって真に必要で信頼できるものと見極めた(前章 4.4.) 投資対象の成長を、動的に惜しみなく支援し続けながら、真に社会の持続的発展を目的として「投資」を実践しなければならない。そうした思想的態度の実践こそ、ケインズの目指した「投資の社会化」ではなかろうか。ステュアートの記述からわかるとおり、「国家」は自然な社会的結合をとり結べない「無縁」の人々の「避難所」である⁹⁸⁾。「国家」は、これらの人々を結びつけ、新たな「社会関係資本」を形成する本来的な責務を果たすべきである。例えば、農業生産においては、単なる生産者と消費者の関係である食糧供給網(サプライ・チェーン)にとどまらず、長い時間をかけて、農業や食糧生産を通じて人と人とが有機的に結びつく「社会関係資本」の形成をはかるべきである。ステュアートが指摘するように、「国家」には、その一部を構成する我々市民の一人ひとりの生活世界が壊れてしまっただけでも、その連鎖的体系という性格上、少なからぬ毀損が生じる⁹⁹⁾。よって、この「社会関係資本」を保守することは、社会全体の保守に直結するであろう。

デカルトが「我思う、故に我あり」(*cogito, ergo sum*)として思考を存在基盤としたのに対し、実存哲学者 F. ハイネマンは「我応答する、故に我あり」(*respondeo, ergo sum*)として「応答」を存在基盤に据えた¹⁰⁰⁾。「金融世界」の自由を目的とする経済思想の肥大化の要因である投機は短期的な売買取引であるため、投機実施者は投機対象に対する「応答」を完遂できない可能性が高い。それに比して、「生活世界」の保守を目的とする経済思想を背景とする投資は基本的に長期計画であるため、投機と比較すると、投資実施者は投資対象に対して「コミュニケーション的行為¹⁰¹⁾」をもってして長い時間をかけて信頼関係を築き(前章 4.4.)、「応答」を全うできる可能性が高くなる。**responsibility / Verantwortung**の両語の原義はいずれも「応答」であることから、「責任」と「応答」の両概念の有機的相互連関が明らかとなる。ハイネマンの「応答」は、ヨナスのいう未来世代への *Verantwortung* 「責任」を全うする原理¹⁰²⁾である。

「配慮」や「いたわり」・「ねぎらい」（前章 4.8.）といった他者を尊重する姿勢を基本として、「蓋然性」をも考慮した上で、自己のもたらず帰結の影響に対して「応答」する「責任」を全うしようとする努力は重要であり、原理的にその *kommunikativ* な姿勢や態度すら欠如している投機は「食うか、食われるか」という創造性なき競争のみに支配されたゼロサム・ゲーム的な発想に毒されているといえる。私見では、「投資」は創造的・創発的な思考様式である一方、「投機」の本質は「盗み」であり、他から「奪う」ことのみを考えている思考様式であるように思われる。

A. シュッツによれば、*Zuwendung*「配意作用」は、「過去となった体験を前提にしている」¹⁰³⁾。つまり、過去の体験を基盤とする「配慮（配意作用）」は、過去から脈々と継承される伝統・文化・慣習によって形成されてきた「生活世界」の「保守」を担いいる概念である¹⁰⁴⁾。「配慮」の充実した「投資」は、「生活世界」を「保守」する概念となりうる。

人間存在の「外延」と「内包」の乖離にこそ病理が潜む。「今だけ、金だけ、自分だけ¹⁰⁵⁾」という限定は、人間の生活世界の視野およびそれによる果実としての「内包」における限定であり、これは広げなければいけない。他方、肥大化した空間領域としての「外延」は狭めなければならない。*investment* / *invest* の語源・原義を参照して導き出されることは、「投資」によって保守できる対象は、おのずから限られているということである（前章 4.8.）。限界効用が一定以上になると逡減していくように、ある程度の範囲を超えると我々人間の配慮は不足していき、それにとまって幸福度も下がってしまう。柴山（2002）の提示する「「不確実性」のケア¹⁰⁶⁾」や「リスクや不確実性によって乱されない精神の安定性¹⁰⁷⁾」を確保する第一歩は、こうした肥大化した「外延」の復元とそれに伴うリスク・不確実性の有限化と「ケア」・「配慮」の充実であるかもしれない。この点に関して「投資」も例外ではないであろう。すなわち、人間存在の「外延」と「内包」の一致を回復した社会を目指すべきではないだろうか。この「外延」と「内包」の一致点である、自らの「応答」できる精一杯の時空間の範囲で応答しながら、一生懸命に生きることをこそ目指すべきである。これはまさに人間生活における「選択と集中¹⁰⁸⁾」である。すなわち、限られた空間領域と人間関係の範囲内で生活するわれわれ人間は、「投資」において、人間生活の「外延」としてはその有限の空間領域を「選択」し、それでいてかつ人間生活の「内包」としては身の周りの他者への一心の配慮に「集中」しなければならないのではないか。その意味で、「投資」の中でも、新規開発となる「新規投資」だけでなく、既存の可能性を信頼して（前章 4.4.）長期的かつ集中的に支援する「更新投資」・「再投資」も重要となるのではないだろうか。

investment の語源と意味を考えれば、投資対象は「衣服」という有限な領域に「包囲」・「拘束」された存在であると同時に、その「衣服」によって外部の「磨滅」から「保護」される（前章 4.5.）ことで、その「衣服」の内において「成育」される。この *investment* の語源と意味の全体像における、「投資」対象の有限性（前章 4.8.）と持続的な発展可能性との逆説的な関係性は、ヤスパースの *Grenzsituation*「限界状況」に関する一連の論述¹⁰⁹⁾によって説明が可能となるかもしれない。彼曰く、「限界状況」とは、「私を制限するものであると同時に、私を充実するところのものである」¹¹⁰⁾。「投資」対象は投資実施者という超越者に必然的に「拘束」されつつも、その

「庇護」を受けながら自然の速度で「成育」される。「成長」を続けて「充実」して「実存」に近づくのである。

カーライルは『衣装哲学』において、「宇宙」the Universe は人類の営為の総体を内包する「衣装」Clothing である¹¹¹⁾と記している。the Universe の原義は、uni- の要素が「一つ」という意味を、-verse の要素が「まわる、巻く」という意味をそれぞれ表し、それら2つの要素があわさって「ひとまわり、一卷き」という意味を表す。この意味の成り立ちからも、「宇宙」は、我々人間界の外周を取り巻く「衣服」であるということが明瞭なものとなる。また、「宇宙」は、古典ギリシア語では *κοσμος* / *cosmos* と表現される。この語は「宇宙¹¹²⁾」という意味を表すほか、*χαος* / *chaos* 「混沌」との対比として、「秩序¹¹³⁾」という意味も表すものである。ドイツの哲学者 A. ゲーレンは自著『人間』において、人間という生き物は雨風をしのぐのに十分な外皮を持つておらず、外界からの刺激に対して無防備な「欠陥生物 (Mängelwesen)」であるとした¹¹⁴⁾。人間は、物理的・器官的な「外皮」のみならず、精神的な「外皮」や社会的な「外皮」も不足しているのではないだろうか。ケインズは、人間には脆く頼りない「文明」のみが「外皮」crust として存在するにとどまっている¹¹⁵⁾としている。ヒュームは、「脆さ」を「人間本性における不治の病¹¹⁶⁾」と表現した。人間は成長してもなお、自らを精神的・社会的に「外皮」として覆う、脆く頼りない「文明」へのさらなる investment 「投資」を必要としており、永遠に成長を続ける危うい精神的・社会的存在であり続けるのかもしれない (前章 4.8.)。そうであるとするならば、ポパーの提唱した「開かれた社会 (the open society)¹¹⁷⁾」という概念は、人間にとって本来的に不適切なものであるかもしれない。社会が成長途上にある最中に、その社会が自発的にではなく、受動的に「開かれてしまった」とき (前章 4.3.)、それはもはや「開かれた社会」ではなく、「こじ開けられた社会」である。「開かれた」という意味を指示する open は多義語であり、「無防備の」という意味をも指示する。「投資」による成長が未完の状態では社会が「開かれた」場合、その社会は「投資」という「装備」 (前章 4.7.) ないし「衣服」を剥ぎ取られた「丸腰にされた社会」となってしまう、人間社会の持続的な発展可能性の芽が摘まれてしまう恐れがある。よって、人間社会には「文明」という「秩序」としての「衣服」を提供する「投資」が必要である。

6. 結論：「生活世界」を保守する「投資」

本稿における語源的解剖および経済思想的検討の結果、investment 「投資」概念の本義は「保守」概念を内包している可能性が提示された。また、investment 「投資」概念は、自由を目的とする「金融世界」において、「ストック」としての「生活世界」を「保守」する目的に沿ったのみ自由に「フロー」を経済的「衣服」としてメタファー的に活用することと定義することが可能であり、その目的から外れた自己目的利得行為、すなわち経済的「衣服」のつけかえ行為である「投機」speculation とは区別されるという一定の基本原則が確認された。「投資」概念の本義に内包される「保守」概念は、この「投機」概念との対比において特に顕在化する。こうした

「投資」概念に内包される「保守」概念に観察される「フロー」と「ストック」の有機的連関にこそ、ケインズが貨幣に関して *veil* という表現を否定し、*investment* という表現を多用して「投資」概念を推奨した要因が潜んでいるのではないか。

古典派経済学が提示し、新古典派経済学によって再解釈の上継承された「貨幣ヴェール観」は、貨幣を実体経済から分離してとらえる結果、実需原則から乖離した貨幣の暴走リスクを高めるという懸念が払拭しきれない。「貨幣ヴェール観」という思考様式は、貨幣を *veil* という実体経済から常時分離可能なものとしてとらえている点で、*disinvestment* という実体経済を軽視する投機を助長する恐れがある。他方、ヒュームの言うように、古典派経済学の提示する「貨幣ヴェール観」には一定程度の正当性も看取される。ヒューム曰く、貨幣は商取引の「道具にすぎない¹¹⁸⁾」。ヒュームは当該箇所、貨幣を「取引の車輪¹¹⁹⁾」ではなく、「潤滑油¹²⁰⁾」であるとしており、ピグーの指摘するような貨幣の自律性¹²¹⁾を認めていないという点に関しては一定の留保が必要であろう。しかしながら、貨幣はあくまでも「生活世界」を「保守」する手段であり、「生活世界」の最終目的たりえないということは万人の認めるところではないだろうか。貨幣は「ヴェール」や「衣服¹²²⁾」であり、我々が日常生活で着続ける「衣服」のように「生活世界」にとって必要不可欠なアイテムであるが、それは本来の意味での「投資」によって我々の「生活世界」を豊かにするための経済的「衣服」以上のものとはならない。まして、人間や「生活世界」を犠牲にすることで貨幣を死守することなど、倒錯に他ならない。ケインズのいうように、「貨幣愛」は「所有」それ自体を目的とするのではなく、「人生を享受する手段」となるべきであろう¹²³⁾。「貨幣愛」は、「投資」*investment* という経済におけるもう一つの「衣装哲学」によって実存的に定位される必要がある。

生活世界という我々の存在する日常空間は、われわれ人間にとって代替不可能な唯一のものである。この日常空間は、ケインズの重要視した「生活のパターン¹²⁴⁾」の集合体であり、ヒュームの強調した *custom* 慣習が指針となり¹²⁵⁾、まさに「資本」ないし「ストック」であるといえる。この悠久の「資本」を、生活世界を顧みない拝金主義のリスクから保守し続け、社会の富と人々の安定した生活を来たるべき未来世代へと子々孫々まで引き渡し、「応答」する「責任」を果たすことこそ、「投資」概念の本義なのかもしれない。それは食の安全でもあり、ケインズが重視した雇用の安定でもある。「生活世界」における個人の生命と尊厳を保守する経済思想によってこそ、「金融世界」の自由の肥大化に起因する多種多様な弊害から我々を保守することが可能となる。「投資」概念の本義の語源的解剖により導き出された「生活世界」の保守を最優先する経済思想を深化させ、万人の認めうる理念へと高めることが必要とされる。

注

- 1) Hayek (1975: 157).
- 2) 以下本稿では、「投資」概念とは、英語における *investment* というラテン語由来の語（およびそれと同語源であるドイツ語における *Investition* という語）によって指示されているものを指す。
- 3) 当該分野では、「投資」概念の定義的研究も豊富であり、同概念の同定にあたって無視できない。
- 4) OED (2023). 以下本稿では、紙幅の制約上、OED online にて参照した英語語彙に関する全ての情報を OED (2023) として一括表記する。特に断りがなければ、以後英語語彙の語義・語源は OED (2023)・寺澤 (1997) を参照したものである。
- 5) *ib.*
- 6) *ib.*
- 7) 瀬戸 (2007: 5f.). なお、特に断りがなければ、以後英語語彙の語義における多義連関（メタファー・メトニミー・シネクドキ）は瀬戸 (2007: 5f.) を参照したものである。
- 8) OED (2023), Anderson (1998).
- 9) *ib.* 外側を包み込むように周りが見えないほどの状態にさせるからか。
- 10) *ib.* 衣服を着せることで職権を象徴的に付与していた。なお、同様の意味変遷過程は、英語の動詞 *clothe* においても観察される。
- 11) *ib.*
- 12) OED (2023), Florio (1598), Anderson (1998).
- 13) “... in pellibus variis et griseis eos investitas ...” (Bernardus Magister, *Multiplices epistole que diversis et variis negotiis utiliter possunt accomodari*, p. 25, ALIM (Archivio della Latinità Italiana del Medioevo) (URL: <http://www.alim.dfl.univr.it/>)).
- 14) «E pauroso della mercatantia, non s’mpacciò d’investire altramenti i suoi denari ...» (Boccaccio (1956: 105)); «... avendo il suo investito in uno anello ...» (*ib.*, p. 124); «... a Napoli ad investire in tele ...» (*ib.*, p. 710).
- 15) de Vaan (2008:578f.); Beekes (2010:1347f.). なお、両語間において、k/p で音位転換 (*metathesis*) が生じている。
- 16) 江口 (1936: 106).
- 17) *ib.*, p. 106f.
- 18) Keynes (1936: 219).
- 19) *ib.*, p. 106.
- 20) *ib.*, p. 108.
- 21) Hume (1888: 492), 柴山 (2004: 134f.).
- 22) Perridon & Steiner (1977: 21).
- 23) 佐伯 (2013: 363).
- 24) Keynes (1931: 302ff.).
- 25) 柴山 (2001: 117ff.).
- 26) Keynes (1936: 75).
- 27) 江口, *op. cit.*, p. 109.
- 28) *ib.*
- 29) Marx (1867: 592), 井村 (1969a: 432).
- 30) *ib.*

- 31) Walde (1938: 434f.), OED (2023), 寺澤 (1997).
- 32) Perridon & Steiner (1977), 柴田 (1979 : 21).
- 33) Keynes (1936: 27ff.).
- 34) 江口, op. cit., p. 104.
- 35) Marx (1867: 393).
- 36) Walde (1938: 674), OED (2023), 寺澤 (1997).
- 37) Keynes (1936: 74).
- 38) Keynes (1936: 60ff.).
- 39) 柴山 (2001 : 113).
- 40) Pigou (1909), Keynes (1936: 215ff.), 高田 (1938), 高橋 (1950), 平山 (2004), 権丈 (2012).
- 41) Keynes (1936: 215ff.); 権丈 (2012 : 74f.) ; 高橋 (1950).
- 42) なお、以下の本稿における「フロー」と「ストック」とは、柴山 (2012b) における定義に基づくものであり、経済学における一般的な意味とは異なる。
- 43) Marx (1894a: 60f.).
- 44) Bourdieu (1979), Putnam (1993), Coleman (1994).
- 45) 柴山 (2012a : 199ff.), 柴山 (2012b).
- 46) 柴山 (2012b), 柴山 (2012a : 200ff.).
- 47) 現金は狭義の投下資本の構成要素には含めにくいとする柴田 (1979 : 30) に符合する。
- 48) Keynes (1931: 302ff.).
- 49) Robertson (1933).
- 50) Keynes (1931: 369ff.).
- 51) Keynes (1936: 211f.).
- 52) Keynes (1936: 378), 柴山 (2012a : 198ff.), 柴山 (2012b).
- 53) ib., 302ff.
- 54) Keynes (1936: 75).
- 55) Schneider (1973: 1).
- 56) Le Coutre (1949: 18ff.).
- 57) Keynes (1936: 63).
- 58) Schmalenbach (1951: 96), 柴田 (1979 : 29).
- 59) Ballmann (1954: 5).
- 60) Keynes (1972: 339), 柴山 (2000 : 44f.).
- 61) Albach (1962: 13).
- 62) Paul (2002).
- 63) Xenophon (1826: 97).
- 64) ib., p. 102.
- 65) ib., p. 97ff.
- 66) Du Cange (1883).
- 67) Pigou (1923:209).
- 68) Robertson (1915:13ff.).
- 69) ib.,p. 13.
- 70) Marx (1867: 604ff.), Marx (1885: 164f.), 宇野 (2010 : 74), 井村 (1969b : 569ff.). ただし、井村 (1969b : 595ff.) は、こうした宇野 (2010 : 74ff.) の理論の画一性を批判している。

- 71) Marx (1867: 577).
- 72) Paul, op. cit.
- 73) op. cit., f. n. 29, 30, 43, 70.
- 74) Marx (1953: 217ff.); 宇野 (2016 : 48f.).
- 75) Forman (2004: 618).
- 76) Habermas (1982: 189ff.).
- 77) ib.
- 78) Oakeshott (1962: 169).
- 79) 佐伯 (2001 : 23f.).
- 80) これに類似する概念として、小野 (1996) の提唱する「生活経済思想」があるが、「保守」の概念は含まれていない。
- 81) Marshall (1930), Polanyi (2001), 佐伯 (2013), et al.
- 82) Habermas, op. cit., p. 522ff.
- 83) Marx (1968: 668).
- 84) Habermas, op. cit., p. 566.
- 85) 佐伯 (2013 : 281ff.).
- 86) Marx (1867: 577).
- 87) Keynes (1931: 321).
- 88) Verbeek (2011).
- 89) 柴山 (2004), 柴山 (2005a), 柴山 (2005b).
- 90) Keynes (1931: 369ff.), 佐伯 (2013 : 355ff.).
- 91) Keynes (1936: 94ff.), 柴山 (2000).
- 92) Dupuy (2002: 102).
- 93) Keynes (1931: 369ff.), 柴山 (2001 : 118f.).
- 94) 福岡 (2017).
- 95) Keynes (1921), 柴山 (2000).
- 96) Hume (1900: 45); 柴山 (2000 : 40).
- 97) 柴山 (2000 : 40ff.).
- 98) Steuart (1767: 87).
- 99) ib., p. 159.
- 100) Heinemann (1971: 285ff.).
- 101) Habermas, op. cit.
- 102) Jonas (2003).
- 103) Schütz (2004: 146).
- 104) なお、invest に関する Forman (2004: 616) の記述中においても、「～を世話する」という意味の *cure* と同語源である *procure* は、*conserve* 「～を保守する」と関連づけられている。
- 105) 鈴木 (2013: 9ff.).
- 106) 柴山 (2002 : 270).
- 107) ib.
- 108) Drucker (1967: 24ff.).
- 109) Jaspers (1932: 201ff.).
- 110) ib., p. 293ff.

- 111) Carlyle (1898: 90f.).
- 112) Liddell et al. (1996).
- 113) ib.
- 114) Gehlen (1974: 16f.; 35ff.).
- 115) Keynes (1972: 447), 柴山 (2003 : 125).
- 116) Hume (1904: 36), 柴山 (2005a : 60f.).
- 117) Popper (1945).
- 118) Hume (1752: 41); 平山 (2004 : 38).
- 119) ib.
- 120) ib.
- 121) Pigou (1909: 27).
- 122) ib., p. 18.
- 123) Keynes (1931: 369).
- 124) Keynes (1972: 449f.), 柴山 (2001 : 128ff.).
- 125) Hume (1900: 45). なお、カーライルも custom「慣習」を「宇宙 the Universe の全精神の衣装を編む最良の織工である」として重視している (Carlyle (1898: 298))。

参考文献

- 井村喜代子 (1969a ; 1969b) 「投資行動にかんするマルクス理論 (1) ; (2)」 (『三田学会雑誌』 62 (5), 423-455 ; 62 (6), 569-604)
- 宇野弘蔵 (2016) 『経済原論』 岩波書店
- 宇野弘蔵 (2010) 『恐慌論』 岩波書店
- 江口行雄 (1936) 「投資の概念に就て」 (『経営學論集』 日本経営学会, 10, 99-110)
- 小野秀生編 (1996) 『生活経済思想の系譜』 青木書店
- 権丈善一 (2012) 「社会保障と係わる経済学の系譜序説」 (『三田商学研究』 55 (5), 57-83)
- 佐伯啓思 (2013) 『貨幣と欲望』 筑摩書房
- 佐伯啓思 (2001) 『国家についての考察』 飛鳥新社
- 柴田寛幸 (1979) 「フィナンチアルリンクの体系と投資概念について」 (『流通経済大學論集』 14 (1), 15-33)
- 柴山桂太 (2012a) 『静かなる大恐慌』 集英社
- 柴山桂太 (2012b) 「経済学は“ストック”を思考できるか？」 (『ART CRITIQUE』 2)
- 柴山桂太 (2004 ; 2005a ; 2005b) 「文明化と野蛮化 (1) ; (2) ; (3)」 (『彦根論叢』 351, 115-138 ; 352, 59-79 ; 354, 139-163)
- 柴山桂太 (2003) 「文明社会論の展望」 (『滋賀大学経済学部研究年報』 10, 103-129)
- 柴山桂太 (2002) 「「豊かさ」の中の不確実性」 (佐伯啓思・松原隆一郎編著『〈新しい市場社会〉の構想』 新世社, 233-274)
- 柴山桂太 (2001) 「J. M. ケインズの経済 — 倫理学アプローチについて」 (『滋賀大学経済学部研究年報』 8, 113-132)
- 柴山桂太 (2000) 「ケインズ道徳哲学における蓋然性の観念」 (『関連社会科学』 東京大学大学院総合文化研究科関連社会科学専攻「関連社会科学」編集委員会, 10, 37-51)
- 鈴木宣弘 (2013) 『食の戦争』 文藝春秋

- 鈴木一存 (2023) 「『資本』概念の言語的解剖」(『社会システム研究』 京都大学大学院人間・環境学研究科社会システム研究刊行会, 26, 93-126)
- 瀬戸賢一 (2007) 『英語多義ネットワーク辞典』 小学館
- 高田保馬 (1938) 「貨幣は被覆なりや」(『経済論叢』 京都帝國大學經濟學會, 47 (2), 159-174)
- 高橋泰蔵 (1950) 「『貨幣分析』と貨幣經濟理論の構造」(『一橋論叢』, 24 (2), 196-213)
- 寺澤芳雄 (1997) 『英語語源辞典』 研究社
- 平山健二郎 (2004) 「貨幣数量説の歴史的発展」(『経済学論究』 関西学院大学経済学部研究会, 58 (2), 29-62)
- 福岡伸一 (2017) 『動的平衡』 小学館
- Albach, H. (1962) *Investition und Liquidität*, Wiesbaden: Th. Gabler.
- Anderson, J. H. (1998) Translating investments, 2 Henry IV, and Hamlet, in: *Texas Studies in Literature and Language*, Austin: Research Library, 40(3), 231-267.
- Ballmann, W. (1954) Beitrag zur Klärung des betrieblichen Investitionsbegriffes und zur Entwicklung einer Investitionspolitik der Unternehmung, Diss. Mannheim.
- Beekes, R. (2010) Etymological Dictionary of Greek, Leiden: Brill.
- Boccaccio, G. (1956) *Il decameron*, Torino: Unione tipografico-editrice torinese. (平川祐弘訳『デカメロン』河出書房新社)
- Bourdieu, P. (1979) *La distinction*, Paris: Minuit.
- Du Cange, C. (1883) *Glossarium mediæ et infimæ latinitatis, Tomus 2*, Niort: L. Favre.
- Carlyle, T. (1898) *Sartor resartus*, London: George Bell and Sons.
- Coleman, J. S. (1994) *Foundations of social theory*, Cambridge; Mass: Belknap Press of Harvard University Press.
- Le Coutre, W. (1949) *Grundzüge der Bilanzkunde*, Wolfenbüttel: Heckners.
- Drucker, P. F. (1967) *The effective executive*, London: Heinemann.
- Dupuy, J. P. (2002) *Pour un catastrophisme éclairé*, Paris: Seuil.
- Florio, J. (1598) *A Worlde of Wordes*, London: Arnold Hatfield for Edw. Blount.
- Forman, V. (2004) Transformations of Value and the Production of “Investment” in the Early History of the East India Company, in: *Journal of Medieval and Early Modern Studies*, Durham: Duke University Press, 34(3), 611-641.
- Gehlen, A. (1974) *Der Mensch*, Frankfurt am Main: Athenaion Verlag.
- Habermas, J. (1982) *Theorie des kommunikativen Handelns*, Frankfurt am Main: Suhrkamp. (河上倫逸他訳『コミュニケーション的行為の理論』 未來社)
- Hayek, F. A. von (1975) *Profits, interest and investment*, Clifton, N.J.: A.M. Kelley. (加藤寛他訳『利潤、利子および投資』 春秋社)
- Heinemann, F. (1971) *Existenzphilosophie lebendig oder tot?*, Stuttgart: W. Kohlhammer.
- Hume, D. (1904) *Essays Moral, Political And Literary*, London: Grant Richards.
- Hume, D. (1900) *An enquiry concerning human understanding*, Chicago: The Open Court Publishing Company.
- Hume, D. (1888) *A treatise of human nature*, Oxford: Clarendon Press.
- Hume, D. (1752) Of Money, in: *Political Discourses*, 41-60, Edinburgh: R. Fleming.
- Jaspers, K. (1932) *Existenzerhellung*, Berlin: J. Springer. (草薙正夫・信太正三訳『実存開明』 創文社)
- Jonas, H. (2003) *Das Prinzip Verantwortung*, Frankfurt am Main: Suhrkamp.

- Keynes, J. M. (1972) My early beliefs, in: *The Collected Writings of John Maynard Keynes*, vol. X, London; Basingstoke: Macmillan St. Martin's Press for the Royal Economic Society.
- Keynes, J. M. (1936) *The general theory of employment, interest, and money*, London; New York: Macmillan, Harcourt, Brace and Company. (塩野谷祐一訳『雇用・利子および貨幣の一般理論』東洋経済新報社)
- Keynes, J. M. (1931) *Essays in persuasion*, London: Macmillan. (宮崎義一訳『説得論集』東洋経済新報社)
- Keynes, J. M. (1930) *A treatise on money*, New York: Harcourt, Brace.
- Keynes, J. M. (1926) *The end of laissez-faire*, London: Leonard & Virginia Woolf at the Hogarth Press.
- Keynes, J. M. (1921) *A treatise on probability*, London: Macmillan.
- Lewis, C. T. & C. Short (1879) *A Latin dictionary*, Oxford: Clarendon Press.
- Liddell, H. G. & R. Scott & H. S. Jones (1996) *A Greek-English lexicon*, Oxford: Clarendon Press.
- Marshall, A. (1930) *Principles of Economics*, London: Macmillan.
- Marx, K. (1968) *Ökonomisch-philosophische Manuskripte*, Leipzig: P. Reclam. (城塚登・田中吉六訳『経済学・哲学草稿』岩波書店)
- Marx, K. (1953) *Grundrisse der Kritik der politischen Ökonomie*, Berlin: Dietz. (高木幸二郎監訳『経済学批判要綱』大月書店)
- Marx, K. (1867; 1885; 1894a; 1894b) *Das Kapital*, Bd. 1; 2; 3, Teil 1; 3, Teil 2, Hamburg: Otto Meissner. (向坂逸郎訳『資本論』岩波書店)
- Oakeshott, M. (1962) *Rationalism in politics, and other essays*, New York: BASIC BOOKS Publishing Co., Inc.
- Pack, L. (1966) *Betriebliche Investition*, Wiesbaden: Th. Gabler.
- Paul, H. (2002) *Deutsches Wörterbuch*, Tübingen: Max Niemeyer.
- Perridon, L. & M. Steiner (1977) *Finanzwirtschaft der Unternehmung*, München: Vahlen.
- Pfeifer, W. (1993) *Etymologisches Wörterbuch des Deutschen*, Berlin: Akademie-Verlag.
- Pigou, A. C. (1927) *Industrial Fluctuation*, London: Macmillan.
- Pigou, A. C. (1909) *The Veil of Money*, London: Macmillan.
- Polanyi, K. (2001) *The great transformation*, Boston: Beacon Press.
- Popper, K. R. (1945) *The open society and its enemies*, London: George Routledge & Sons.
- Putnam, R. D. (1993) *Making democracy work*, Princeton, N.J.: Princeton University Press.
- Robertson, D. H. (1933) Saving and Hoarding, in: *The Economic Journal*, Oxford: Oxford University Press, 43(171), 399–413.
- Robertson, D. H. (1915) *A study of industrial fluctuation*, London: P.S. King.
- Schmalenbach, E. (1951) *Kapital, Kredit und Zins*, Köln: Westdeutscher Verlag.
- Schneider, E. (1973) *Wirtschaftlichkeitsrechnung*, Tübingen: J.C.B. Mohr.
- Schütz, A. (2004) *Der sinnhafte Aufbau der sozialen Welt*, Konstanz: UVK Verlagsgesellschaft. (佐藤嘉一訳『社会的世界の意味構成』木鐸社)
- Steuart, J. (1767) *An Inquiry into the Principles of Political Oeconomy*, Vol.1, London: A. Millar & T. Cadell.
- de Vaan, M. (2008) *Etymological dictionary of Latin and the other Italic languages*, Leiden: Brill.
- Verbeek, P. P. (2011) *Moralizing technology*, Chicago: The University of Chicago Press.
- Walde, A. (1938) *Lateinisches Etymologisches Wörterbuch*, 3. Neub. Aufl., Heidelberg: Carl Winter's Universitätsbuchhandlung.
- Xenophon (1826) *ΞΕΝΟΦΩΝΤΟΣ ΟΙΚΟΝΟΜΙΚΟΣ, ΣΥΜΠΟΣΙΟΝ, ΊΕΡΩΝ, ΑΓΗΣΙΑΛΑΟΣ*, Oxford: Clarendon Press.